

公共の場の 構築

住民の手による場所づくりの
試みから見えるもの

白根良子……しらねよしこ
親と子の談話室「とぼす」主宰

滋野淳治……しげのじゅんじ
佐倉市企画政策部財政課

赤井直……あかいすなお
「ひかしまち街角広場」代表

小松 尚……こまつひさし
名古屋大学大学院助教授

司会
鈴木 毅……すずきたけし
編集委員会委員
大阪大学大学院助教授

記録
田中康裕……たなかやすひろ
大阪大学大学院在学

鈴木 私は都市や地域の公共的な場所の質について研究しています。ここ何年か、いろいろ見てまわるなかで、建築や施設の専門家ではない人たちの手によって企画され、つくられ、そして運営されているいくつかの質の高い場所に出会ってきました。これらの新しいタイプの地域の場合は、いわゆる従来の施設ではカバーできない公的な性格を担っているように思います。本日はこうした興味深い地域の場を運営されている皆さんにお集まりいただき、目指されたこと、場を成立させるための工夫についてお話をうかがいたいと思います。また、こうした新しいタイプの地域の場合について研究されている小松さんにも加わっていただき、その意義について考えたいと思います。

はじめのねらいと漸次的変化

鈴木 最初に、18年も前からこのような場を追求されておられ、本日の座談会にも場所を提供して下さった白根さんに、どのような経緯、ねらいで「とぼす」を開かれたのかをおうかがいしたいと思います。

白根 私が「とぼす」を始めた当時、子どもが通う学校には登下校指導というのがありました。子どもたちが道路をゆっくり歩

いたり、路地裏とか桜の木の下にしゃがみ込んでしゃべっていると、生活指導の

先生が自転車に乗って来て、ハンドマイクで、「早く家に帰りなさい!」と怒鳴られるという状況があり、思春期の子どもはゆっくりできる場所が大切なのになと思っていました。それから、子どもたちにとって、大人とのかかわりが学校の先生と自分の親だけしかないという現実があり、それだと子どもたちが、学校で勉強しないようないろいろなこととか、人とのつきあい方とかをどこで学ぶのかなと思ったこともあります。だから、「とぼす」は子どもたちがゆっくりできて、しかもいろいろな職業を持つ大人に出会って、自分は将来こういう職業に就きたいと考えることができるような、そういう場所にしたいと考えました。

赤井 「とぼす」は根本は喫茶店というスタンスで運営されているわけですね?

白根 そうですね、子どもも大人も入れる喫茶店。児童館とか、子どもの遊び場とか、フリースペースという言葉は、入ってくるのに何か制限されている響きがありますよね。それから、私一人きりで子どもを抱えるのではなくて、ここに来る大人の人たちにも子どもを見てもらいたい、そうすると喫茶店がいいかなと。喫茶店っていえば、子ども以外は誰でも入れますよね。だから「子どもも入れる喫茶店」にしたのです。ただ、最初は子どもが中心で、その周りを大人が見守るところだったのですが、今は少し変わってきて、30歳から50歳ぐらいまでの大人がここへ来るのです。そういう人が、誰にも話しかけられず何時間でも本を読める場所、家のこととか何もかも忘れて私とおしゃべりできる場所、そういう場所になっています。

小松 来る人が変わってくることにに対しては、それでいいと受けとめてらっしゃるんですか、それとも、もう少し子どもの方へ戻したいと思ってるんですか?

白根 ここは喫茶店なので人との出会いがその流れをつくりていくのです。だんだん出会いの渦巻きが広がって行くというのか。だから「ちょっと待って」とは私には絶対言えない。も

座談会風景(左から白根氏、滋野氏、赤井氏)



ちろん、中心は子どもということは常に頭にありますが、人との出会いがここを動かしていった、いいように変えていったっている。だから変わっていくことに対してあまりストレスはないですね。

鈴木 では次に、佐倉市「ヤングプラザ」設立の経緯をお聞きしたいと思います。

滋野 千葉県には非行問題などへの対応として、人口7万人以上の市に補導センターを設置する動きがありました。佐倉市も設置を促されていたのですが、当時、市では補導という概念だけではなく、青少年がもっと気軽に集まってきて、相談などもできたりして、そういうなかで青少年が自らの力を育てていき、自らの力で非行防止することができないかと考えてヤングコミュニティ構想というものをつづけていたのです。京成佐倉の駅前にあった銀行跡地を市が取得した際、その構想を具現化していこうということになり設立されたのが「ヤングプラザ」です。当時なぜ国の補助金を使わなかったかという、弾力的にいろいろ動けるものにするためには、やはり市の単独事業でやっていくのがいいだろうと考えたからです。そのため予算もかなり限られていたのですが、気軽に集まれるという趣旨がありましたから、放課後の居場所をテーマに整備を進めていきました。ちょうどそのころ、上司から「君が一番若いんだから、ちょっと考えてみなさい」と言われまして。普通、新採の職員が施設整備の担当者ということはありませんでしたが。

赤井 ご専門は建築関係だったのですか？

滋野 全然違います。大学は教育学部でした(笑)。「ヤングプラザ」は完成してすぐ1月30日にオープンしました。それも上司から、「年度を待って4月から年度オープンというよりも、とにかく完成したんだからまずは使ってもらって、それから考えていったらいいんじゃないか」と言われたためです。備品なども、最初のころは公民館の長机をもらってきて、それに白いシートをかけてオープニングをやったりとか、徐々に徐々にという感じでした。

赤井 行政にしてはすごく柔軟ですね。

鈴木 だから今日ここにお呼びしたんですよ(笑)。

滋野 雑誌の購入も1年契約にはしないで、毎月普通に伝票で買いかたちをとっていましたから、「これは読まれていないから、ほかのに変えちゃおう」ということがすぐにできたのです。

赤井 そういう対応をしてくれる行政は、市民にとってはすごくありがたいですね。もういらないうものでも、やっぱりこれは決まったものだから山積みになる。悪く言えば、「行政がしてやったんだから、使いなさい」というかたちです。行政の支援を受けると、そのあたりを自由にできないのが大変なところなんです。

滋野 行政はどうしてもイメージの方に入ってしまう。こういうものをつくったのだから、ここはこんなイメージだろう、という感じ

で。でも、実際それが使われるかどうかはまた別ですよ。とくに、補助をもらった場合は、面積要件とか、設備要件とか、職員の配置とか、全部要件が出てきます。市が単独でやったことで、「ヤングプラザ」は柔軟に動ける施設になったのかなと思いますね。

小松 先ほどだんだん来る人が変わってきたことをどう考えていらっしゃるのか、とお尋ねしたのはまさにそこなのです。地域のニーズに合わせてながら運営していくのは、今までの公共施設では難しかったことなので、それを積極的にとらえていくのはすごく大事なことだと思います。

赤井 「ひがしまち街角広場」は、国の「歩いて暮らせる街づくり」という事業がきっかけになって生まれた場所です。当初、市は計画を練っていましたが、その計画を聞いた私たち地域の人間は、「完璧な計画を練ったからこの計画に従っていきましょうと言われても、計画に縛られると上手いかならないから、なにはともあれ、まず場所をオープンさせて、そのなかで出てきたいろいろなニーズに合わせて動いていきましょう」と言ったのです。役所はその時はしぶしぶOKしましたが、「今だから言いますけど、あんな恐いことなかったですよ」と行政の人は言っています(笑)。

場のしつらえへの配慮

小松 現在の、いわゆる公共施設は、ガラス張りになったりどんどん華美になっているのですが、「ヤングプラザ」にしても、「街角広場」にしても、非常にささやかなしつらえですね。でも逆にささやかなゆえに、そこの主(あるじ)がやりたいことがはっきり見える。例えば「とぼす」には本がたくさんあることがはっきり見えるので、来る人は「ここはこういう場所なんだ」というのがよくわかります。

白根 私は、「とぼす」を始めるまで一人で喫茶店に入るのがあまり好きではありませんでした。何かときどきして落ち着かない。それなら、本を置けばいいかなって。というのは、本を置けば、「どうぞ見てください」ということだから、自分の本を持ってきて読んでいても、安心していられる。それとここは、例えば、こちらの方で患者さんのお客様とお話をしていると、向こうの方から、「すみません私も統合失調症です」なんて声が聞こえてくるの(笑)。

赤井 そうそう、うちもそうですよ。

白根 言わなくたっていいようなことを言ってしまうのです。

赤井 このテーブルと向こうのテーブルが別々に分かれているのではなく、知らない間にそこにいる人全員が……。

白根 聞いている、という感じですね。

赤井 だから、同じ共有意識を持ってしまうんです。

白根 それでいて、あんまり割り込んではいないですね。

田中 以前そういった雰囲気はかなり意識されているとお聞

きたのですが、最初から意識されていたのですか？

白根 そうですね、最初から。

鈴木 あっさり言われると専門家は困ります(笑)。

白根 意識したというか、そういう場所をつくりたかったのです。例えば家族がそうですよね。いつも「大丈夫？」って聞かれていたら息がつまってしまいます。だから、お互いにそれぞれが自分のところに座っていて、誰からも見張られ感がなく、ゆっくりしてられるけれど、何か困ったことがあるといった時にはそばにいてくれる、そういう空間が必要だなと思って、設計士にそういう空間を設計をしてくださいをお願いしたんです。

鈴木 どこか参考とした施設などはあったのですか？

白根 私はないですが、設計士の方にはあったと思います。

赤井 公共施設と言えば、豊中にもバブルのころに計画されたようなところがあります。ところが行ってみると、何かこう自分にしっくりこなくて、腰が落ち着かなくて、そこで何をしたいかわからない。いろいろ先進的なものはありますが、それを使いこなせない。そこにいる人に聞いてもきちんと説明してもらえなくて、居心地が悪いんですね。「街角広場」はそうではなくて、一から十までありあわせを集めてこしらえたような場所です。もうそれこそ、スプーン1本、箸1本、全部持ち寄りのありあわせです。「街角広場」にあるもので買ったものは、今度できたカウンターだけです。自分たちの家で余っているものをそれぞれが持ってきているから、自分たちの身の丈に合ったものばかりなのです。だからそれを上手く使いこなせたのだと思います。特別に勉強してやっているわけでもない、ほんとうに普段着の生活、普段着のままで生活をしている。その普段着同士の付き合い、フラットなつきあい、それがいいと思うのです。

小松 名古屋は喫茶店が多いのです。例えば、地域に行ってみる人に話を聞こうと思うと、「ちょっと行こうか」と喫茶店へ連

れていけます。そして行ってみるとそういう人たちがいっぱいいて、同じように話をしている。今の日本のなかで商業施設にはすごく公共性がある、いろいろな人を受けとめているということを感じますね。そうしたことを思いながらいろいろ見ているなかで、「ヤングプラザ」や「街角広場」に出会って、商業をまわなくても、ある公共的な場所をつくり出していることに感激して、どうしたらこのような場所を説明できるかを考え始めました。専門家のなかには「あれはそこの人が、お茶が好きでやっているんだからそれでいい。お店と一緒に」と言う人もいます。だけど、私は少し違うのではないかと思います。公共施設といわれるものができなかったことを乗り越えているところがあるので、それをきちんと説明できたら、このような場所をもっと認知されるだろうし、ひょっとするとこういう考え方がいわゆる公共施設の方にも広がっていくのかなと漠然と思っています。

田中 小松先生が商業施設のことをおっしゃいましたけれど、お店というのは、例えば「コーヒー飲みに行こうか」とか言うように入りやすい場所です。実際、「とぼす」と「街角広場」はお店です。他方、「ヤングプラザ」はお店ではないけれど、自由に入ってそこで過ごしているたくさんの人がいる。その部分はどのようなことを意識されていたのですか？

滋野 そうですね。やっぱり目的がなくても気軽に来られる空間だからだと思っています。喫茶店とか、図書館のように何か目的があれば、ある程度それを目的に集まることができると思いますが、「ヤングプラザ」はそうではない部分があります。それで参考にしたのが、ロビーとか、駅の待合室です。でもまったく何もないわけでもなく、一応雑誌とかもありますし、机があれば、子どもたちは勉強をしに来ようとか、友だちと話をしに来ようとか、カードゲームやりに来ようみたいな感じで来てくれるのかなと。ただ、とにかく予算が限られていましたので、気軽に来やすい雰囲気をつくることに集中しようということで、机の形や高さを変えたりとかいろいろ考えました。

小松 家具の話は私のなかでその後も響いていて。少ない予算のなかで、いろいろな家具を用意して、形もそうだけれども、姿勢が少し違うとか、視線が違うとか、なるほど、すごく大事なことです。ことだと思いましたね。

滋野 公民館のロビーだけをつくったようなものですから、類似の施設というのがないです。ほかにもいろいろなところも見てまわりました。生涯学習センターに行くと、陶芸の釜や調理室があったりしますが、われわれはお金がなくてそういうものはつくれないです(笑)。もっとお金があれば、こういう機能も入れて欲しいという希望はあったのですが。

鈴木 カウンターみたいなものもあって、そこで勉強している子もいましたよね、図書館とここを使い分けている。

滋野 勉強する子は多いですね。申し込みをして利用する場所ではないので、はっきりと把握することはできないのですが、

親と子の談話室「とぼす」

東京都江戸川区／1987年4月オープン／思春期に「友と語り合える場所、自分を見つめる場所、素敵な大人と出会える場所」があればと考えて始めた子どもだけでも入れる図書コーナー付きの喫茶店。来店した人々とかかわり合いのなかから、「とぼすとその仲間展」や「とぼす響きの会」などの活動が自然に生まれている。現在では、成人した当時の子どもがふらっと訪れるなど、年齢を問わずさまざまな人々がお茶を飲んでゆっくり過ごしたり、集まったりすることのできる場所になっている。



1日の利用者は大体80人から100人ぐらいです。年齢別では小学生が4割ぐらい、中高生が3割ぐらい、残りの3割がそれ以外の小さい子か高齢の方です。「街角広場」と似ていると思いますが、午前中は高齢の方や主婦のグループ、例えば子ども会の役員さんが来て、出し物の練習の打ち合わせをしたりとかですね。放課後の時間は、最初は小学生が、それから中高生が来るというかたちです。

鈴木 キオスクのおばさんが食事をしていたりして、年齢や属性が混っていたのに私たちはとても驚きました。

滋野 どのように整備するかを検討していたとき、高齢者の居場所にして欲しいという意見もありました。それで、「ヤングプラザ」というふうにはうたってはいますが、とくに利用制限はないので、「もっとヤング」でも、「元ヤング」でも構いませんということで自由に活用していただいています。

小松 先ほど公共施設が華美になっていると言いましたが、違う言い方をすると、すごく立派だけど何ができるのかがよくわからなかったりすることで、入るのをためらう人がたくさんいます。普段そういう建築を見ているわれわれが「ヤングプラザ」を見ると、非常に新鮮で、すごくいいなって思えます。こうではないと人は来ないなど。

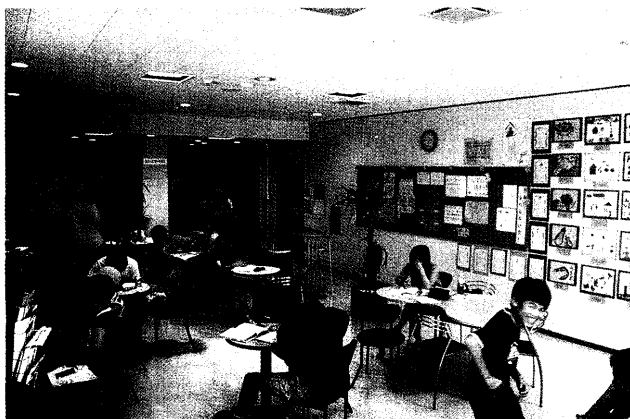
顔の見える主(あるじ・ぬし)

小松 私はいつもこういう場所に来ると、みなさんもてなしかものすごく上手だなと思います。単にお話が上手なことだけではなくて、人と人が向かい合うというか、知らなかった人が、接点を持つための工夫を、すごく、だけどさりげなくやっていらっしゃる。例えば、お茶ひとつでもそれをきっかけにしてあるコミュニケーションをつくるというようなことです。

鈴木 多摩ニュータウン永山団地の福祉亭を訪れたときも、運営されている寺田恵美子さんのお客さんへの対応の様子

佐倉市「ヤングプラザ」

千葉県佐倉市／1998年1月オープン／中高生に「放課後の居場所」を提供することを目的として計画された佐倉市独自の施設。担当職員が駅の待合室やホテルのロビーなどを参考に、思い思いに居られる自由度の高い空間を提案・実現し、中高生だけにとどまらず、幅広い年齢層の人々が気軽に訪れることのできる場所になっている。バンド練習のためのスタジオや機材の貸し借り以外は、受付で登録する必要はない。建物は元銀行を改修・再利用している。



を見てみると、「街角広場」の光景と似ているなと思いました。

小松 それは「なんとか流」とかではなくて、それぞれの皆さんの、まさに主の個性があるがゆえに、できていることだだと思います。

赤井 「街角広場」では、ボランティアの人も暇な時は一緒に座ってしゃべったり、逆に忙しい時はボランティアじゃない人がいきなり来て手伝ってくれたりします。だから来る方もボランティアだし、お手伝いしている方もボランティアという感じで、いつでもみんなが同じ立場でいられるのがいいのです。それから、話をしている間にいろいろな相談事が出てくるんですよ。それをあらためて相談事とするのではなくて、愚痴として聞いてくれる、それがいいんですよ。だから相手が一生懸命しゃべっている時は、うなずいて聞いて、「ふんふん」って相槌を打って、「うんそうや、うちもそうやったわ」と言ってあげれば、それで相手は安心する。解決策なんか言わなくても、相手が言いたいことだけ言えたなら、大体それで自分のなかで解決していくのです。

白根 私も、さっき聞いたことをぱっと忘れてしまっ。でも一生懸命聞いてあげようという気持ちが伝わるのですね。

赤井 行政とか、専門家の人は仕事だからそんなことできないですよね。

白根 そうでしょうね。聞いたことはちゃんとメモして整理しないと。でも私は、医者でもないし、保健士でもないし、なんでもない普通の街に住むおばさんですけど、だからこそかえって、子どもも精神を病む人も安心するみたいですね。何を話してもいいと。そういう私の活動の特異性みたいなものが、「とぼす」を有名にしているのかもしれない。だから、「とぼす」のメインの商品はね、私だと思っていますよ。

鈴木 まさに小松さんの言う主ですね。

白根 コーヒーの味などは、はっきり言ってどうでもいいと私は思っています。葛西の方に展覧会で行った時には、必ず行きたい喫茶店っていうのがあります。そこを経営している女性に会いたくて行くのです。一度行った時、その人の息子さんがやっていたことがありましたが、ちょっとがっかりしちゃったなと思いましたね。だからやっぱり、場所をやっているその人が一番の商品だと思うので、その人が自分を磨いていかなければだめだと思いますね。それから、うちの夫には、「私に似たお客さんばかり来るね」と言われたりします(笑)。大勢のなかにいるのは嫌いで、私としゃべるとか、一人だけで本を読みたいというお客さんが多いです。友だちとしゃべるところは、ほかにくらでもあるけれど、一人で何か考え事をしたい、そういう場所はないそうです。お客さんが多いと、「さっきは『とぼす』らしくなかったですね」って言われますよ。

小松 一人で過ごす場所がないっていうのは重い話だと思います。設計する方は、一人でもたくさんの人に体験して欲しいというようなことをすぐ考えてしまいます。

白根 そうなんです。だから「そんな座りやすい椅子を置いたらだめです」と言われます。もうお尻が痛くなって、早く帰りたいという椅子でないとだめなんですって。

居場所を設置すること

田中 最近文部科学省が小学生を対象に放課後の居場所づくりを学校でやっています。あの活動は、世代間の交流が生まれるという意味もあると思います。すでにオフィシャルな動きとしてそういう居場所づくりが始まっていますが、どう思われますか。

白根 江戸川区もすすくスクールというのを始めました。

赤井 私のところでは公民分館で受けていますが、子どもたちにいろいろなことを無理やりやらせているという感じですね。しかも3年間の計画で、3年たったら予算がなくなるというのです。でも地区で生んだことはその後も継続して行って欲しいと言われる。私のところは予算がなくなっても、もともとボランティアで済ましているのでもいいのですが、よその地区はみんな困っていますよね。3年たったらその財源をどうするのかって。

鈴木 動き出したら、財源がないと活動できないということですね。

赤井 そんな、無理やりに子どもの居場所づくりをしてくださいって、それはおかしいですよね。地域で放課後なんとかしてください、お金も出すからなんとかしてくださいって。それはちょっと違うのではないかと思います。

白根 うちの学校では、最初のころはみんな興味があって来ていましたが、だんだん参加者は減っています。低学年はたしかに集まります。だけど高学年になると、例えば6年生はその日1日、一人とか。それから、民間の人というか、ボランティアさん、おじいちゃんおばあちゃんとか、いろいろな何かやれる人と呼んで、子どもとかかわらせるというのが文部科学省の居場

所づくりですけど、そういうことをやってくれる人が今いないですよ。仮にそういう人がいて、「私できますよ」と言ってくれたとしても、職員はその人をどう扱ったらいいか困ってしまう。だからボランティアのサポートセンターをつくって、一カ月間のスケジュールをつくり、何日は誰々が来てくださいますよになってしまって、どうしても組織立ってしまう。そうすると、「行けますよ」って言っても来なかったり、急に「すみません、今日はちょっと行けません」っていう人が出てくる。その結果、スケジュールが狂ってしまう。そういうことがあると、かかわっている職員としてはイライラして、だったら、もう民間の人は入れないでいいや、自分たちだけでやろうみたいになってしまうのです。こうした場所を運営するうえで、何が一番難しいかと言えば、そういう大人をコーディネートするのが難しい。

滋野 私は、放課後の時間の過ごし方は大切だなと思っているのですが、どうやってその放課後を過ごすかは子どもたちが自分で好きに決めればいいと思いますね。例えば、「ヤングプラザ」の近くに美術館があって、その駐輪場の陰のところに中学生がよく来ていますが、彼らがそこの方がいいのであれば、それで別に、他に影響がなければ構わないと思うのです。だから、「ヤングプラザ」は彼らの選択肢のひとつになっていればいいのかなと。

小松 そういう意味では、子どもは使い分けみたいなことをしていると思いますね。

赤井 子どもはしていますね。

滋野 児童センターの方に行っている日もあれば、「ヤングプラザ」に来る日もあるという感じで、子どもたちはうまく使い分けしていると思います。

小松 だから、「ヤングプラザ」に来る中高生は3割というのは、私は逆にいいことではないかなと思います。ターゲットはあるけれど、そこを中心にすそ野が広がっていく。文部科学省の計画は、小学生に限定しているので、やっていることに何か閉塞感を感じます。

世代間のかかわり

赤井 旧市街と違って、私たちの街は3世代同居というのはほとんどありません。それで、時々地域で世代間交流をしようというイベントが行われます。でもイベントですから、お互いお客さん同士です。その時だけお年寄りの肩を叩くのですが、そのあとで誰の肩を叩いたか、誰に叩いてもらったかもわからないし、道で会っても「この間はありがとう」の一言も出ない。そんな世代間交流なんて私は意味がないと思います。「街角広場」は1階にありますから、何も用事がなくても店の真ん中を通って帰る子どもがいる。そうすると、そこにはお年寄りとかいろいろな年代の人が来ていますから、そういうなかで、子どもたちもいろいろな人と自然に顔見知りになって、道で会ったら、

「ひがしまち街角広場」

大阪府豊中市／2001年9月オープン／国の「歩いて暮らせるまちづくり」事業をきっかけに、千里ニュータウン新千里東町の近隣センターの空き店舗を生活サービスと交流の拠点として暫定利用する社会実験としてオープン。社会実験終了後の2002年04月からは、住民ボランティアの手により運営されており、「お気持ち料」100円のコーヒー・紅茶を提供するだけでなく、さまざまな情報交換の場所として、さまざまな地域の団体やグループの会議場所としても利用されている。



挨拶をしたり話をするようになってきているみたいです。この間も面白い話があって、今の子どもは、「家どこ？」って聞かれても「教えたらいけない」と言われているんですね。それで、ある人が、普段よくしゃべっている顔見知りの子どもに道で会って、その子がたくさん荷物を持っていたから、「ようけ荷物あんなんな、大変やろ、どこまで帰んねん？」って聞いたら、その子どもは「言うたらあかんねん」って答えたんですって(笑)。もし普段の接触がなかったら、「あんなものの言い方をするなんて、この頃の子どもは生意気な」になってしまうわけですよね。でも、普段の接触があるから笑い話で許せる。それがほとんどの世代間交流だと思うのです。

滋野 自然に集まって、自然に触れ合うなかでの交流ですよ。世代間交流といって、高齢者のところに幼稚園児が行き、皆で歌をうたったりするのがよくありますが、その場はすごく雰囲気がよくても、あとが続きませんよね。

赤井 イベントをしたらそのあと何か尾を引いてくれないと意味がないと思うのですが、なかなか尾を引かないのです。

白根 あとに尾を引いて、その芽が出るというのがイベントの目的ですね。

鈴木 何かをやること自体が目的になっているのですね。

地域の交差点

白根 「とぼす」に心の病の人たちがだんだん来るようになって、7年ぐらい前に「とぼす響きの会」というのを始めました。そうしたら、保健所もそうした人たちに、「とぼす」に行ってください」とか言うのです。江戸川区には大きな精神病院がひとつもないので、心の病の人たちは、歯医者に行くにも、眼科に行くにも、すごく苦労しています。

滋野 やっぱある程度理解できるお医者さんでないと、適切なケアができない。

白根 そうです。総合病院ならカルテも回って来ますし、医療サイドで当事者を理解できますよね。だけど、個人医院に行ったら、本人が「私は精神の病です」と言ったとき、「ほんとにあなたは精神の病ですか」と突き詰めるわけにはいかないし、「どんな薬を飲んでいますか」と聞かれてきちんと答えられない患者さんもいるかもしれない。「とぼす」はそういう時、保健所と提携して、「こういうところに行ったらいいよ、ああいうところに行ったらいいよ」という情報を提供する場でもあるのです。

赤井 「街角広場」でも、開設の時から学校へ働き掛けて、「ここを起点として学校の情報を外に出すことを考えてみてはどうですか？」と言ってきました。だから「街角広場」にはいつでも学校通信が貼られています。中学生になると、とくに男の子は、学校からもらった手紙を家に帰っても出さないんですよ。親にとってみたらほとんど学校からの連絡が来ないのが、「街角広場」へ行けば学校全体のいろいろな情報が得られると、それ

はもう最近はお母さんたちがよく読みに来ますね。学校の先生も地域に全部知らせようと思ったら、なにはともあれ「街角広場」へ情報を持って行くのが一番いいというかたちで情報発信に使ってもらっています。

滋野 学校の通信とかを「街角広場」に貼り出すというのは、すごいなと思いますね。

赤井 それから「街角広場」には行政もいろいろなものを持てきます。それで「あそこへ行けばなんでもわかる」というふうになってきたら、もう変な話、映画館の割引券まで持って来ます、1カ月のスケジュール表と、それにくっついた割引券。そうすると、やっぱりそれを待っている人がいて、「今月あそこ遅いね」とか言ったりしています。

滋野 われわれ行政がサービス提供をする時に、地域の方にどうアプローチするかという課題があります。公民館にやたらと情報を貼っても、その方が公民館に来るとは限らないわけですから。地域のそのコミュニティのなかで、皆が気軽に来るような場に情報提供するというのは効果的だと思います。それができているのはすごいと思います。

赤井 「街角広場」はなんでもありのところですからね。「人」の一時預かりもしています。「ちょっと家の掃除をするから、車椅子のこのおじちゃんを預かっていて」とか、「ちょっと買い物に行くから、この子どもらを置いていていいですか」とか。なんでもできることは、やれてしまうんですね。

小松 役所の出先機関は本当はそういう役割を担わなくてはならないのではないかなあ。

滋野 役所自体が、用事がなくても行きやすい場になって、そのうえでいろいろな情報の提供を受けられるような場でないといけないのです。

小松 赤井さんは、もうそれを実践されていますよね。ところで、「街角広場」を始められる前、地域の自治会長とか何かそういうことをされていたのですか。

赤井 そうですね。PTAに参加したり、青少年の補導員をしたり、自治会関連の仕事したり、地域とはずっとかかわっていますね。だから地域の知合いが山ほどいます。

小松 こういう場では地域に長年培っているネットワークが大事ですよ。だから、「とぼす」にしても「街角広場」にしても、それがあるから、今のような使われ方と交流が生まれているのではないかと思います。

鈴木 それぞれ経緯もねらいも異なる三つの場所ですが、柔軟な運営や、しつらえの話、それから主の話など、共通点も多く、いくつかの重要なキーワードも見えてきたような気がします。本日はいろいろ貴重なお話をお聞かせいただき、ほんとうにありがとうございました。